【　歴史&宗教　No005―1　】　今世に歓迎する神仏習合

私は宗教面においては無宗教者である。政治政党的には無党派である。しかし、宗教と政治には大きな関心を持つ者である。

さて、宗教は信教・信仰の自由と絡んで内心の機微に触れる部分であることからは触れたがらないというのが大方であろう、ましてや、宗教界において、ここに神職と僧職と聖職を円卓テーブルで向き合わせたとし、相手の宗教の功罪・善悪について冷静な論法を以って、ラリー論争出来るだろうか。そういう場面の設定そのものを忌避するかもしれない。そうでなくても、表向き・建前上において、表面上は自分の心の領域に、あるいは物的な施設内に神仏キ混交状態を許容するだろうか。神道界と仏教界とキリスト教界は職業上においては、思想・哲学や所作・作法の違いを以って区別し、時には相手方を批判的に見ている節がある。宗教法人法の適用はその区別を行わず１本である、対象の「宗教団体とは、礼拝の施設を備える神社、寺院、教会、修道院その他これらに類する団体」とあるとおりで区別していないのだ。ところが、一般の人さえも別々の法律があるかのように誤解し、別物であると思っている人が大多数だろうと思っている。

振り返って幼少の頃の思い出がある、お盆の時にある寺院に行きお参りした時である、何気なしに柏手を打ったら親戚の人から“手を叩いてはならない、御寺では手を合わせるだけ、手を叩くのは神社”と強く諭された記憶が鮮明に残っている。それからは、御寺とか神社は何か恐ろしい所というイメージを引き摺って、解けたのは社会人になってからであった。

ところで、世の中は匿名・流動型犯罪（ルフィ広域強盗事件や首都圏連続強盗事件）が横行しとても物騒な社会になってしまった。原因を、根源を究極の処突き詰めれば人間関係に帰結すると考えている。解決するためには、異なる立場を相互尊重した上での対等互啓（恵）精神を声高に強調する者である**。立場の違いをそのまま相互是認の上で、相手の役割を最大限尊重し、同じ時空を共にして諸々の祭儀を担って来たという歴史（神仏混交）の重みに鑑みて、神仏習合・神仏混交の心を涵養する姿勢こそは、今世に生きるものの対等互啓（恵）精神を育む最大の眼目（象徴）であるという問題意識がある。私は常々、偏った・片寄った・一方に凝り固まった考え方を自戒しているが、神仏習合は今様の多様性社会のあるべき姿や寛容性を象徴する道標（みちしるべ）として捉えている。今に残る神仏混交から学ぶこと大なるものがあると考え取り上げる。**

私は定年退職翌年の 2010(H22)年から後期高齢者初年の 2024(R6)年まで、全国の歴史街道ならびに四国徒歩へんろのスルーハイク遊学紀行（15 年間・512 日間・15,546km）を敢行して来た中で、多くの神社・仏閣を訪ねて参拝し、神職（神社関係者）や僧職（寺院関係者）と多岐に亘り懇談して来たが、現代においても役割が違うということとして、僧職の大方は神（かみ）（神社）の有り様をそのまま受け入れる考え方を吐露するが、神職の大方は仏（ほとけ）（寺院）の有り様を受け入れることに抵抗感を持つ人が多く、神道（神社）空間に仏教の匂いが入ることを、仏教色が残っていることを忌避しているように写った、明治の神仏判然施策（廃仏毀釈に曲解）以降、ケガレ思想――今の寺院は人間・動物の死体を扱って金儲けをしているという偏見が根強いからではないかと察した。そのような空気感は私の意にはまったく沿わないものだ。

ここで同感する二人の識者の考え方を取り上げる。

宗教学者山折哲雄著「神と仏」（講談社現代新書）P205 より拝借する。「・・・神（もしくは神信仰）と仏（もしくは仏信仰）とが、形式的にも機能的にも様々な面で相違点を持っていたことは言うまでもない。まずもってその両者は、イメージの面で対照的であるし、また、その救済の作用においてもそれぞれに独特の方法を持っていたからである。しかしながら、それでは神と仏は我が国の文化風土において敵対的な関係を取り結んでいたのか、と言えば、決してそうではなかった。対立や敵対どころか、実態はむしろ、協調、融和の関係、そして統合の関係さえを生み出していたといわなければならないからだ。あるいはそれは、相互補完的な関係であったということができるかもしれない。・・・」　この本には沢山の実例を挙げて解説しているがまさしくその結びの言葉のとおりであると思っている。

また同氏は、天外伺朗著「心の時代を読み解く」（飛島新社）の中で次のように述べている。「・・・神道と仏教が共に日本人の宗教観を形成したという事実は一般に考えられている以上に、日本文明に深い影響を及ぼしていると思います。興味深いことに、歴史を振り返ってみますと、仏教が常に神道的なものによって塗り替えられていることがわかるんです。そのため、日本列島で千五百年間受け継がれてきた仏教はインドの仏教や中国の仏教と本質的に違うものになっている。・・・ともかく、神仏混淆あるいは神仏習合という思想は、現代社会の諸問題を解決する糸口になるほど大きな意味があります。ですから、**外交折衝や国際交渉の席上で、そんな価値観に基づいて主張できる日本のリーダーがいてもいい**、と私は常々思っているんです。・・・」　　（下線と文字の協調は筆者）

今でも、日本人は一人の人間でありながら、赤ちゃんが生まれた時、七五三の祝いの時、住宅の新築や自家用車を購入した時は神職のお祓いを預かり、結婚式に当たってはキリスト教会で挙式し、この世で命が途絶えたならば仏式の埋葬・葬儀を受け、もしくは、大都会のコンクリート群の中にも小さな神社を建てるなど、挙げれば切りがないほど宗教宗派の何たるやはおかまいなく神仏と縁を結んでいる。日本人はこれらの混在・融合を平然とやり抜くのである。現代でも、神社の祭神は何なのか、寺院の仏本尊は何なのかはお構いなく、神社に赴いては柏手を打って頭を垂れ、寺院に赴いては合掌して首を垂れる。しかし、神と仏はよく分からないがどこか違うと思う、そう思いつつも軽重・優劣を断定せずお参りする。なぜ、なのだろうか。

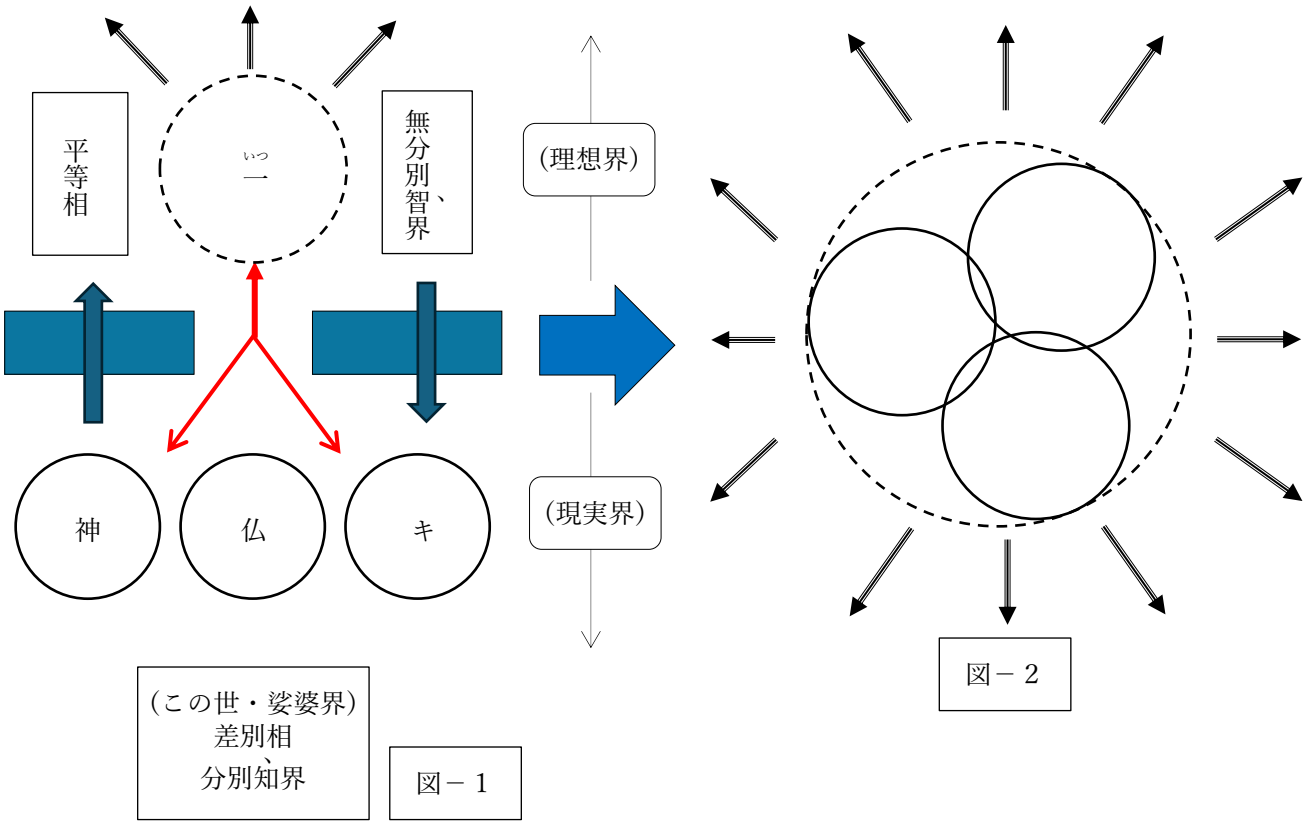
日本では一つの神が複数の名前を持ち、一つの神社で複数の祭神を祭り、仏の世界も「十方諸仏」と言われる、昔から様々な神々と諸仏が融合した神仏混交、神々習合、佛々習合が日本人の心の中でトルネードされて来たのである。宗教や信仰は思想信条の内面、その根幹に根差すものであり、とてもセンシテイブな事柄故にかえって日本人は今でも神仏の精神を簡単に分離出来ないでいるのである。

このような日本人の宗教心は、日本の宗教史を辿れば、仏教が入って来た時は、仏教を「蕃神（あだしくにのかみ）」と称し、すなわち、外国から入って来た神様と捉えたのである。平安末期に大乗仏教特徴の一つ、本覚思想（人は生まれた時から仏性を備えている、煩悩即菩提の考え方）が現れ、本地垂迹の思想（神は仏の変わり身だ、神と仏は表裏一体の関係と捉える）に繋がった、神仏の同体・同居の思想であった。例えば、神様を拝めばその本家本元の仏様を拝んだことになる、逆に仏様を拝めばそこから生まれ変わった神様を拝んだことになる。さらには、大乗仏教涅槃経に「一切衆生　悉有仏性」（人間は生まれた時から仏性を宿す）、天台は拡大し「草木国土悉皆成仏」という思想に高めた。こういう時代推移（背景）のむ中で、宗教に留まらず結局は包容性、重層性、多層性の大和精神が醸成されて来たのだ。

このような日本人の無宗教的信仰心について私の切り口で記述する。構図は図－1のとおりである。図－2はそれぞれの個性を持ちながらも協和・融和・協調の世界をイメージしている。個性を維持しつつ外

に対して一つになる、外から見た場合は一つに見えるものの個性も浮き出ている、この理想を発現するためには、内にあっては個性という境目は相互承認しつつ境目を外すという現実化を必要とする。

娑婆界の私達は神（神社）・仏（寺院）・キ（キリスト教会）はまったく別物と思う処は、原初的な二元論、派生的な三元論に支配された「分別知（差別相）」に染まっているからだ。一方で、神・仏・キは、本を質せば人間知では如何ともし難い天上の崇高なもの・偉大なるもの（見えぬ霊魂）が故に「無分別智（平等相）」なるものである。そこには神・仏・キの教義境界がない（Non）世界である、縄張りや囲い込みのない世界である、神・仏・キ側から見れば優劣を以って人間を振り分けしない、選別しようと画策する世界ではない（Non）のだ。だから、人々は安心して一つの神社・寺院・教会に大勢の人が赴き参拝をし、強弱・優劣を競う戦いが生じないのだ。



次に、私の宗教観を簡単に記述する。冒頭のとおりに私は無宗教者であると公言したが、神・仏・キは現実化力・実現力を持たない――社寺に行って何かを祈願した処でそのとおりに実現はしない、あるいは、神職・僧職から祈祷して貰った処で災難や病気になるものだ――ことからは**「敬神崇仏＝偶像崇拝」と断じている者である。**つまり、私には「神願仏頼・願神頼仏（神に願い仏に頼ること）」は一片たりともない。

しかし、私は神社・仏閣やキリスト教会も大好きである。「敬神崇仏＝偶像崇拝」を左極とすれば、「神社・仏閣大好き」は揺り戻しの右極である、バランス化の自動発動である。　もちろん大好きではあるが特別の思い込みや執拗な感情の入れ込みは皆目ない（Non）、何かの教派・宗派に属する胡散臭い似非（えせ）宗教者の言葉などは取るに足らずで問題外である。生身の人間**（宗教職業人）**が説く敬神崇仏は他を排撃する原理主義と表裏・紙一重の関係にあることからは、某宗派に傾倒すればするほど、あらゆる「もの・こと」に対する思想信条が偏って行く、執着していくこととなる、政治の党派所属も同じだ。そういうものに私は加担しない。　いわば、一般的に矛盾・撞着すると思われる考え方は私の心では両立・同立・並立し何

の問題もないのだ。私の心は左翼と右翼の両思想がごちゃ混ぜで、仏魔同居（やさしい仏性と冷たい魔性が同居）であることを自覚している。だからこそ（かえって）日常の「もの・こと」に対する見方はこのとおりの性格なので何の問題も生じないのだ。

私は、神・仏・キに向かい忠誠心をそのまま傾けられる態度は、**天から垂れる神様の教え、天から垂れる仏様の教え、天から垂れるキリスト様の教え**が大好きということである。**生身の人間（宗教職業人）の教説ではない（Non）、至高の真善美の教え、人間の理想精神に導く教え**が大好きということである。その心は、神道は八百万神の天地・大自然の大法則、極無限の自由の道――「随神（かんながら）の道（人の私心を加えない、人為的技巧のない神意本来の道）」と、仏様の「無量寿・無碍光（むげこう）の道（量り知れないほどの尊い命を存分に活かす道）」、キリスト様の博愛主義（人を裁くなかれ・新約聖書 マタイ７章1～5節）の永遠の教えには頭を垂れ平伏（ひれ）すことが出来る。人間としての真理追求を促す教えであり、そのような量り知れない崇高偉大・至尊至貴なる神（かみ）・仏（ほとけ）・キに対しては、敬懼（敬慎畏懼（けいしんいく）／敬い慎み畏（かしこ）み懼（おそ）れる）敬仰（けいぎょう）の心を以って額づくものである。もしくは、神道に繋がる「アニミズム（人間以外の生物を含む、あらゆる木や石などの物の中や自然現象にもそれぞれの個性的な魂が宿っているという思想や信仰のこと）」や仏教で説く「草木国土悉皆成仏（アニミズムに類似、通底する）」の感性も大好きである。繰り返すが、今世の生身の神職や僧職や聖職がこのことを解説したからといって、もはや個人的見解が入ったもの、脚色された方便であって、私には意味を持たない、つまり、無視である。まとめて、**私が対話したいのは真の神威仏光である、天が垂れると言ったが、実はその精神は私が誕生した時に与えられて来た良心・致良知に備わっているものだと自覚出来る、その自噴に素直に従うことにしている。**したがって、今の神社本庁の日本神道とか、空海とか最澄とかそういう個別・特定の宗派に縛られる、傾倒するものではない。

私は、このような思想・信条、すなわちシンクレティズム（諸教混交思想）を是とするsyncretist（シンクレティスト）なのである。しかし、私だけではなく（Non）、アニミズムに根差し八百万の神を祀って来た日本人は、ＤＮＡ（細胞内の核に存在する遺伝情報の物質的な実体）にシンクレティズム精神が沁み込んで来た人種であることは当然なのである。いずれにしても、シンクレティズム思想は西洋の一般的な一神教世界にはない、理解されないだろうから、今日、多くの外国人観光客が来日し、神仏聖地の代表地、京都・奈良など多くの神社仏閣を訪れていることに鑑みて、日本人の精神基層に根付いている神仏混交精神の良さをもっと積極的に訴求・啓発していく必要性を感じる。同思想は人種や民族、宗教の違いをのり越えた地球人融和の道標（みちしるべ）であると自信を持って良いのではないだろうか。　なお、シンクレティズムとは平易に換言すれば「ごちゃ混ぜ」である。

ところで、我が国におけるキリスト教側からの見方はどうなのか、とても参考になる「カトリッサク教会の諸宗教対話の手引き」を紹介する。宗教的儀礼と社会的儀礼を区別すべしと謂いながら、上記したとおりの**日本人特有の心に寄り添った対応を説いている。**人間関係や地域との繋がりを大切に、神道や仏教が浸透している祭りや葬儀等の冠婚葬祭に参加・参列は是とし、ただ、心の中では神（キリスト）に祈りを捧げるとある。例えば、「Ｑ70／神社仏閣を訪れる時は、どういう心構えと態度が必要なのか？　Ａ70／私達は、神社仏閣を訪れた時、そこに祭られている神々や仏像を、白分の信仰の対象として礼拝するのではありません。しかし、そこに祭られている神仏を信じている人々に対する尊敬の心を表すために、合掌や敬礼をすることもできます。」とあるように日本の神・仏は信仰・礼拝の対象とはしないが、無用な対立回避や融和的近所付き合いのために協調するという態度であり、実に日本的である。

（end）